

高退協ニュース

高退協事務局

1984. 1.

No. 20

・所感 浜田敦義・吉川寛
 ・帰農記 山下碩彦
 ・大つごりの哀歌 木村信夫
 ・正月料理 市川まさ
 ・仲間の皆さんと前進を 山崎博幸
 ・年末雑感 山崎博幸

所感

浜田敦義

四月の県選で、幡多郡地区から立候補した中沢清春さんの後援会の役員となり、幡多地域の有権者との話し合いの席にしばしば顔を出したが、有権者の関心は地元利益になるかどうか集中している。雷川原選にしても、漁民は基本的には反対しているのに、漁協の役員は港灣整備事業の推進をからとる為には、中内知事・自民党議員の輪流に尤よらざるを得ない現状から、漁協の役員会で自民党候補を推薦し、これを漁民に押しつけている現状である。

大方町では、前回の町長選で、革新陣営で推薦し、自民党推薦の対抗馬を破って当選した現町長が、陳情政治に汚され、中沢候補の演説会には顔を出さず、自民党候補の演説会には知事と共に出席するといふ一幕もあった。

田中元首相が刑事被告の身でありながら、「二万票を獲得した牙盾も、陳情政治の因果関係からすれば当然のことであり、当選みそぎ論など、もってのほかの暴論と言わざるを得ない。

その点、高知県民には良識が残っており、六期当選で大臣候補の大物を落選させた。田中派に属していた為である。

年末の選挙で、自民党が三十数議席も減らしたことは、ロッキード判決に対する国民の審判であるといふマスコミの論調は、単なる論調で終ることなく、これを機会に、金権政治、陳情政治解消への具体的な措置をとらなければならぬことを痛感する。

(一九八三・十二・二五)

帰農記

山下碩彦

農業に従事するようになってつくづく思うのだが、農業は教育に如何にも酷似している。

野菜一つ作るにしても、それが今何を欲しているか、水か、肥料か、その肥料も、窒素分か加里分か、等々、毎日のように作物と対話できるようにならなければ一人前の百姓とは言えない。

教育現場が叫ばれる今日、同じく生き物を育てる教師の基本的な心構えに思いを馳せる今日この頃である。

大つごりの哀歌

木村信夫

客年秋の高退協の「ガキ・アンケートの健康状態に「普通」と書いて出した翌日(奇しくもそれは「門田候補を励ます会」へ行った次の日でもあった)、腰痛が再発し、それに高血圧性脳症という診断を受けて、以後毎日の通院。

新春早々、根暗(ねくら)の話題になりましたが、正月だと昔の川に言つかる程のんだ酒も思うように飲めないのです。

ところで去年の一大ニュースは山原さんの大選です。

開票時山も見えずに原々が

さすか健在

二位のますら郎(お)

選挙二日前の金曜日で病院からの帰途、山原さんが家の子郎党ともども遊説するのに出会った。見識の北岡女史が目ざとくぼくを見つけて「木村先生、お願いします」「今度は危ない」とぼくは言ったが、この危機感が戦慄となった。

(八三・十二・三)

正月料理

市川まさ

幼い頃の祖母の手による正月料理を思い出してみたい。年越しの夜は、干大根・里芋・こんにゃく、それに必ず煮る糸こんにゃく、それに必ず煮る糸こんにゃく、お節は黒豆・数の子・酢ごぼりなどが松竹梅模様の陶器の重箱鉢に一品づつ並べられ、元日はそれらに雑煮が加わる。厚く大きな長方形の切り餅を水菜などと柔かく煮て何杯もおかわりする。終りは煮つまつて粘りを生じたことだ。一方、餅はたつぷり用意され、「ことしは何斗揃いた」などと話題にもした。本だんはめつたに口にしないあんもちやみかんなど、子どもにとって正月はうれしき日々だ。

昨今は豪華で新しいお節風の料理が紹介されて和風の他、洋風・中国風など賑やかである。しかし、せめて正月には昔ながらの伝統料理で祝い、目先の変わったアイデア料理などは本だんの日に楽しんでほしいとプロの料理家のMさんは言う。私も同感である。ことしはMさん直伝の方法で初めて黒豆を満足に煮ることができた。

仲間の皆さんと前進を

山崎博幸

新しい年が明け九。師走の山原先生大選の喜びがお正月気分を一層引き立ててくれる。「当選の喜びを」と駆けつけたテレビ局の方に「高知県人は偉い」と言われた。私も全く同感でした。しかし先生がああ席で第一声として電波に乗せられたことは、とりもなおさず国会議員として毎日の活動が、又その訴えが純粋で一点の曇りもないからこそ言えたのです。田中角栄の二十二万票にはあいた口がふさがらないのですが、万一角栄が「新選組人は偉い」と言ったら日本中の人はどんな顔をするでしょう。

今年の高退協の仲間入りして初めてのお正月、山原先生が同じ仲間であつた今頃気がついて、ぼくはぼくとしていられないとやせ馬に鞭打つてしまふ。

投票日の前日の夜のこと。娘の友人(二十二歳のOL)に、もしやと電話してみな時のことを思い出しています。やはり頼まれた人があるとこのことでしたが、今年度の選挙の大切さを訴えたところ、

「いや本当？ 今までいろんな人に頼まれたけど、おばちゃんみたい初めたくわしく話してくれたいのは初めてじゃあ。考えんといかんねえ。」

「おばちゃん私の頼まれてる人は○○さんだけだ。」

と相談を持ち込まれ、会話の中できちんと自分の投すべき人を決めました。まことに素直に人の話を聞き、自分の考えを作り出していた。今年は皆様と共に、もっと勉強して「偉大な県民」を大切に、可能性を一杯もつた若い人々、未組織の人々に語りかけ共に前進する年にしていかなくてはと思っています。

年末雑感

山崎博幸

選挙に暮れた年の瀬も、新年を迎える飾り付けや準備になにかと気ぜわしい。家で飾り付けは昔にくらべると随分簡素化された。印刷物を玄關に貼る門松飾りなどは、その最たるものであろう。

ところで神社の飾り付けは昔の仕きたりのままのものが多いように思う。部落にある神社の飾り付けや神事いっさいは、昔からの慣例にならぬ部落の当番があたり、一年中を受持つ。これを当番(とりや)と言ふ。今年はその当番である。普段何気なく見過ごしている飾り付けが、いざとなると同一つ確実に行けるものがない。しめ縄は八十四才になるおやじに作ってもらいし、どのようにしたらよいかを聞きまわり、やつのことと飾り終る始末。雄松(黒松)と雌松(赤松)を選び、雌松を社に向つて左に立てる、といつた具合。遺曆を迎えるというのに俺の自信に繋るものはなんだろう？ と気も短したくなる。

退職後初めて迎える正月、特別にどうということはないが、年男として、それなりに息災にすぎたいと思ふ。せめて屠蘇酒だけでも一家で楽しく嗜み邪気を屠り絶ちて精気を蘇らさんと思ふ。皆さん、どうかよいお年を。

所感

吉川 寛

謹賀新春。學生においては何時もながら何用にもなりませんでしたが、高退協の諸兄姉には昨年中御苦労でした。

無念なこと会心のこと、波瀾の一年でしたが、さて明ければ、新自由クラブの入閣に象徴される中道の正体は論外ながら、「自衛隊は違憲だが違法ではない」と野党第一党から新陣が飛び出して、平和憲法の空洞化はまさに「現実」音をたてて押しよせるこの逆流に、あくまでも抵抗するわれら、しがらみの一団となりたいたいものです。

